
翼竜の影と共に草原を駆けよう、手を広げて

小さな木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

翼竜の影と共に草原を駆けよう、手を広げて

【Nコード】

N7612R

【作者名】

小さな木

【あらすじ】

魔法×科学。異世界×基底世界。SF×ファンタジー。

「1」サンプル

―（点滅している）

ひけんたいの（キーボードを打つ音）

被験体の狭理遺伝子について――（点滅している）

被験体の狭理遺伝子について

(改行)

(改行)

(改行)

被験体 A：コードネーム ヒカリ の場合。

（改行）

染色体数：4 6

種：ヒト

性別：女

年齢：5

血液型：A A | R H +

システムの受容に成功。クオリアへ通常接続中。引き続きビトロにて様子見観察とする。

（改行）

（改行）

被験体 B：コードネーム ヒカル の場合。

（改行）

染色体数：4 6

種：ヒト

性別：男

年齢：5

血液型：A A | R H +

システムの受容に成功。クオリアへ通常接続中。引き続きビトロにて様子見観察とする。

（改行）

（改行）

簡易的な考察。

多くの失敗作を作ってきたこの狹理遺伝子付加実験だが、被験体により人間として忠実に作りあげたこの双子の姉弟においては、容易く同遺伝子を受容した。共にバイタルは正常。しかし、ビトロ内で作成された人工生物の多くはビトリフィケーションの可能性があり、この2名についてもそれは同様のものと考えられる。現在のところは異常なし。

（改行）

ヒカリ ヒカル には知性があると思われる。その証拠に、ビトロ口内より我々の動きを目で追い、動きを真似て体動をする。また、口を動かし、しゃべろうとする仕草もみられる。試験的に語学教育を施すことを検討中。

(改行)

(改行)

P・S 理事長へ

これは私的な意見ですが、 ヒカリ ヒカル をビトロより開放し、それぞれを一人の人間として扱い、研究内容もより人道的なものへと切り替えるべきと存じます。あの子たちには知性があります。感情があります。それは、5年間研究を共にした研究チームのメンバーすべてが事実として認めていることです。私としては、

(改行)

(改行)

(改行)

(改行)

(改行)

(改行)

(改行)

(改行)

(改行)

―― (点滅している)

「2」ナリア

近い未来。

現在のWebネットワークは一層の広がりをみせ、それはもはや「もう一つの現実世界」であった。人はいつからか、その肉体なき電子世界のことを クオリア、物質ありきのこの世界の事を 基底世界 と、分けて呼ぶようになった。

クオリアへ接続するには、機械的媒介が不可欠だった。人はその工程をできるだけ簡略化すべく、脳にデバイスを埋め込み、意識するだけで直接クオリアへと接続できる技術確立する。 電脳化と呼ばれた。

科学先進国日本では、もはや電脳化は戸籍を得ると同様の国民的必須義務だった。しかし、電脳化手術の大衆化により、その成功率は9割以下と不安定を極め、加えて個人負担費用も国民の重荷となった。

この問題を受け、政府は、NAREA：拡張世界研究開発機構（National Augmented-Real Exploration Agency of Japan）を設立。「手術を必要としない、安全かつ確実なクオリアへの接続手段」の研究に着手した。

その一方で、クオリアから基底世界への干渉を可能にする技術の開発も進められた。

ナリアの職員で構成されたその研究チームは、無から万物を創成する非現実的な研究を徐々に形にしていた。クオリアからの干渉に

より、科学的に起こりえない事象を実現しはじめた研究チームは、
いつからか周りから 魔法開発局 と呼ばれるようになった。

「3」―遊び相手

メンドクセーと思い、私は文章をすべて削除した。^{デリート}そして、まっさらなテキスト欄にこう書いてやった。

F u c k ' n A s s H o l e

カタカタつとキーボードを打ち、タン！ とエンターボタンを押した。

ブラインドタッチには自信がある。もちろん、電脳化した同僚が打ち出す　生み出すとも言えるな　文章と同等の速度で、だ。…そんなことはどうだっていいか。

「^{ひるかけ}蒜影、報告書は書き終わってたか？」

突然、その同僚が後ろから声を掛けてきたんで、私は慌ててテキスト欄を三度、白紙の状態に戻した。変な噂が立つと困るからだ。「魔法開発局の蒜影は理事長の尻の穴を狙っている」なんて。お生憎私は、多くの男性がそうであるように、同性の者を性の対象として捉えることなどできない。

「まだ真っ白じゃないか……。どうすんだよ、また居残りか？」

同僚が溜息を吐いて、イスを私の横に持ってきた。そして座った。この部屋には私とこの同僚の2人しかいない。それ以上に人が入るうものなら、すぐ酸欠になって死んでしまう。ここは小さな研究室だ。研究室とはいっても、散乱しているのは試験管ではなく書類ば

かり。そういう部屋だ。私の真正面では、最新型のデスクトップ・コンピュータが、煌々と明かりを発している。おかげで部屋の照明は付けなくても良い。薄暗い壁には、所狭しと収納された学術書。誰がどこから持ってきたのかは謎とされている。そんな部屋だ。

「なにを書けって言っんだ」

「サンプルの状態経過に決まってるだろ」

ぶつきら棒に言い放った私に対し、同僚は、すぐさまそう言い返してきた。私は気が滅入った。

「それなら今しがた書いたところだ。だが、意味が無い。どんなにがんばっても、前回書いたものと同じ物しか出来上がらないぞ」

「そうは言っても、真っ白じゃないか」

「消したんだから、当然だろう？」

私は立ち上がって、今にも書類の雪崩に埋まっていまいそうなコピーメーカーから、愛用のコップへとコーヒーを注いだ。同僚はまた溜息を吐いた。私と一緒に働くようになってから、彼は溜息が多い。それは私のせいというよりは、同僚の気質にも原因があるように思う。

「局長がどれだけお前の為に気を使ってくれているのか、お前は知らないだろう？」

同僚もまた、私と同じようにコーヒーを淹れた。私はコンピュータ・デスクに腰を置き、コーヒーをすすりながら答えた。

「知っているさ。パールウェブ局長には頭が上がらないよ」

「それならなぜ、理事長に睨まれるような真似をするんだ。以前もあのサンプルを培養管ビトロの外に出そうとしたろ？ …… 被験体汚染コンタミネーションが発生したらどうするつもりだったんだ」

「もしそうなった場合はもちろん責任を取るよ。次の実験に全力を尽くすと誓おう」

溜息。

「その“次”っていうチャンスをお前に与えるために気を回してくれるのが局長じゃないか！」

「だから、頭が上がらないって言ったろ」

溜息。

「これだから。今時、電脳化をしてない奴の思考回路はわからない」

「私は、私のそういう部分が買われたからこそ、今ここにいると思っっているよ」

溜息。同僚は、手に持ったコーヒーを一気に飲み干そうとした。しかし、コーヒーがまだ熱いことを忘れていたようで、小さく叫ぶと顔をしかめた。コップから零れた黒い液体が、真っ白な白衣の上で見事な水玉模様に変わった。

私が静かに笑うと、同僚も照れ笑いを滲み出した。

「さて、そろそろ時間かな」

私はパソコンのディスプレイに映された時計を見て、パチンと手を打った。同時に、ピピピ、ピピピ、と、PHSが音を鳴らす。予め練習でもしていたかのように、抜群のタイミングだった。

この建物の中でPHSを持っているのは私だけだ。なぜなら、この建物の中で電脳化をしていないのは私だけだからだ。同僚や他の職員は、みな頭の中で連絡を取り合っている。さぞかし、私の悪口を言い合っていることだろう。だが、私はそのようなことはあまり気にしない。興味がない。

「もしもし」

「ロビーです。蒜影さん、いつもの子、来てますよ」

「はい、今迎えに行きます」

私は飲みかけのコーヒーをパソコンの横に置くと、書類の山の中から一つの本を発掘し、タイトルを確認した。同僚が首を傾げる。

「なんだ？ 日本の絵本か？ なんて書いてあるんだ？」

「なんて書いてあると思う？」

同僚は肩をすくめて、口をへ字に曲げた。わからないらしい。私は首に下げた職員証を扉にかざして、同僚が残る小さく薄暗い部屋を後にした。

廊下は強い人工の光で満ちており、それだけでめまいがしそうだった。両こめかみに手をあて、少しふらつきながらもロビーへと向かう。

やはり職員証をかざして自動のドアを開けると、突然、まるでここかのモンスターパニック映画のように、金髪の小さな生き物が私に飛び掛ってきた。思わずよろけて、地面に腰をついてしまう。

「あっはっは！！ 蒜影、来たよ！」

「ああ、よくきたねシェアリア。また一段と重くなったね」

「そう！？ 身長もね、前から6番目になったのよ！」

私に飛びつき、押し倒し、抱きついてるのは、まだ12歳の少女だ。シェアリア・パールウェブ。ヨーロッパ系の可愛い顔立ちと丁寧な英語は、まるで育ちのいいお嬢様だ。いや、実際にシェアリアはお嬢様と呼ばれる地位のある家に産まれている。

クオリアによる基底世界干渉技術を研究している、私が在籍しているチーム、通称“魔法開発局”。そのリーダーであり、みなから局長と呼ばれている。実際にそのような役職は存在しないのだが。もちろん魔法開発局というのも、公式な名称ではない。人物こそ、ラードリック・パールウェブ。シェアリアの父親なのだ。

局長は、政府が海外の有名大学から引き抜いてきたエリート研究者であり、成功者だ。シェアリアは、そんな局長の一人娘。大事に育てられている。……が、その性格はともお嬢様と呼ばれたものではない。ご覧のありさまだ。

そんなシェアリアがなぜ私に懐いているのかというと、週に一回、彼女には被験体に対する重要な役割の一つを担ってもらっているのだが、その目付役として局長から指名されたのが私だったのだ。

「ねえ、今日のご本はなに!？」

目を爛々と輝かせて、いつまでも私から離れないシェアリア。私は手に持っていた本をシェアリアに差し出した。

「ネコさん!」

シェアリアは、愛らしいネコの絵が書かれた絵本を両手に持ち、ジツと眺めて、感嘆の笑顔を浮かべた。

「ひゃくまん……くち?？」

「The Cat That Lived a Million Times」

なんとか日本語を解読しようとしているシェアリアに、私は助け舟をだした。すると、納得したように頷いて、絵本の正しい和名を言う事ができた。私はようやく立ち上がり、そして正解を言ったシェアリアの頭を撫でてやった。

「今日はそれを読んでやってほしいんだ。あの子たちにね」

「うん! ……でも、ちゃんと読めるかなあ」

英語以外の本を渡すのは初めてだった。一応シェアリアは英語や日本語をはじめ、多くの言語を学んでいるとの事だ。もし日本にもい

い本があつたら、それを読ませてやってくれ、とは局長の言葉だ。

「しっかり読めるようになるまで、何度も読みなおせばいいだろう？ あの子たちも、きっと最後まで付き合ってくれるよ」

「わかった！ じゃー行こ！ 蒜影！」

シエアリアは、今日もまた無垢に了承してくれた。ガラス一枚を隔てた、液体培地に浸かるあの2人の遊び相手を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7612r/>

翼竜の影と共に草原を駆けよう、手を広げて

2011年10月7日22時22分発行